

次の成熟社会に必要な住まいをつくる

2023年の新春を迎え、登録施工店の皆様にはつつがなく新年を迎えて、ますますのご清栄をお慶び申し上げます。

コロナ禍とウッドショックで、一昨年に続き2022年も資材の異常な高騰で大変な迷惑をおかけいたしました。また打合せにおきましては、オンライン等での情報伝達を余儀なくされましたが、変わらぬお引き立てを賜り、ご懇情ありがとうございました御礼申し上げます。

いま世界はさまざまな困難に直面していますが、世界は近代文明の終わりを迎えたという識者もいます。地球環境の悪化、資源の枯渇が差し当たっての大問題ですが、近代文明は成長を前提とした文明です。あらゆるもの、人口、経済、産業、福祉、情報すべてがつねに拡大してゆくことが、文明を発展させ維持するための前提になりました。

その発展を引っ張ってきたのが、「大量生産」「大量消費」「大量移動」という3つの行動でした。大量のものを生産し、大量に消費し、物流だけでなく、移住、通勤、通学、旅行などを目的に、飛行機、鉄道、自動車、バイクなどを使って大勢の人々が移動する、そういう行為が近代文明を成長させてきました。

世界の人口は80億に近づき、なおも増え続けようとしています。二酸化炭素の排出量も増え続けています。この3つの「大量」をいつまでも続けていくわけにはいかないことを、誰もが理解し始め、さまざまな対策を試行錯誤しながら実践しつつあるのが現状でしょう。

衣食住のなかで住を受け持つ私たちがなすべきことは明白です。世界のなかでも特に寿命の短い日本の木造住宅を、欧米を超える長寿命にすること。第2世代、第3世代が住め、100年200年の耐久性がある木造住宅に変えることです。

そこに住む第2、第3の世代とは自分の子孫とは限りません。中古住宅として次の世代が住むのです。中古住宅が新築を上回って流通することが資源の浪費を防ぎ、環境を保護することになります。世代による生活様式の変化に対応できることも重要で、スケルトン&インフィルに適した構造躯体が必要です。

耐震、耐風の強靭な住まい。湿潤な風土に適した風通しのよい住まい。曾孫の代まで通用する住まい。私たちが取り組んできたSE構法の住宅は、近代の終焉を乗り越えて次の成熟社会に必要な住まいです。2年後には四号特例の見直しとBIMの実用化が実現します。追い風をうまく利用して明るい未来をつくりましょう。

本年もよりいっそうのお引き立て、ご愛顧をよろしくお願ひいたします。

参考文献『大丈夫な日本』福田和也著(2006年、文春新書刊)

株式会社エヌ・シー・エヌ 取締役会長
杉山恒夫

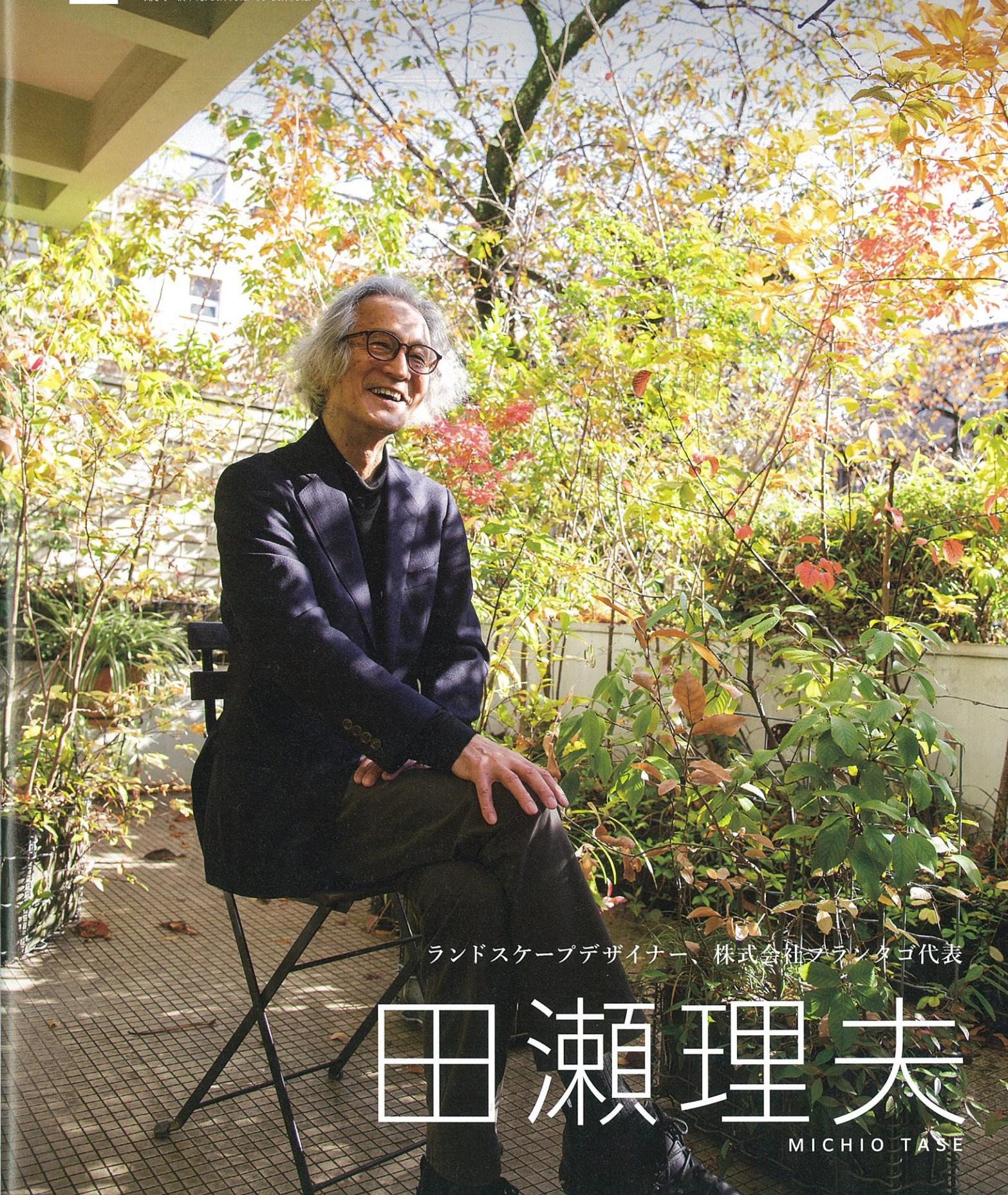
耐震構法
SE構法

家づくりは庭づくりの始まり

— 地域の植物を植えて地域の環境をつくる

巻頭インタビュー

聞き手: 橋本純、長井美咲 / 文: 長井美咲 / 写真: 深澤次郎(特記以外)



ランドスケープデザイナー、株式会社アランタゴ代表

瀬 理 夫
MICHIRO TASE

地域の植物をできるだけ種類多く植えること。

ランドスケープデザイナーの田瀬理夫さんが庭づくりで力説するポイントはシンプルだ。

庭づくりはまちづくりにつながるから、

家を建てたら当たり前に庭をつくってほしいとも話す。

“建材砂漠”をオアシスに変える

——田瀬さんの代表作である福岡天神の複合施設「アクロス福岡」は、公園に面した南側が今は緑に覆われ、見事な“山”になっています。竣工から25年以上経った今も、管理のために現場に行っているそうですね。

田瀬 植栽管理の監修という仕事で毎年行っています。建物の管理会社の初代社長が見識のある方で、これは設計した人が面倒を見ていないとよいものにならないと、業務として僕が継続的に関わるようしてくれたんです。管理会社をはじめ関係者とは60年かけて育っていくという目標を共有しています。

現地に赴くと、巡回点検して状況を確認し、次年度の管理計画を立てます。ゆくゆくはこんなイメージの山にするために、この木を払って、そこにこの苗木を植えましょうとか提案したりしてね。毎年どんどん変わりますから、メンテナンス業務も創造的なデザイン行為といえます。僕が今も関わっているというのは、建築界にとつてもよい見本になるでしょう。

アクロス福岡は、沖縄・海洋博公園の「熱帯ドリームセンター」の仕事で一緒にした日本設計の浅石優さんに声を掛けてもらって参加しました。「都市に山をつくる」という試みで、僕は「花鳥風月の山」というコンセプトを提案し、福岡市周辺の山々に自生する



樹木など76種37,000本を混植しました。毎年少しづつ補植したり、鳥が種を運んで来たりして今は120種以上に増え、自然の山の環境にどんどん近づいています。落ち葉をゴミとして搬出したことは一度もなく、人工軽量土壤に落ち葉が堆積して、しっかりと保水しながら階下に少しづつ雨水を流すので、灌水装置もほとんど使わずに済んでいます。人工軽量土壤に用いたアクアソイルは保水力があり、とてもよい植栽基盤です。

最近、枝打ちした後に積み上げていた枝に、クワガタムシの幼虫が棲み始めました。本当の山のようになりつつあって面白いですよ。

——田瀬さんが関わっているプロジェクトでは岩手県遠野市の「クイーンズメドウ・カントリーハウス馬付住宅プロジェクト」も類例のないものです。

田瀬 遠野はかつて日本一の馬産地で、人と馬がひとつ屋根の下で生活するなど、人と馬が共に暮らす文化が古くからありました。遠野の美しい風景は人と馬の関わりによって形成されてきたんです。でも、高度経済成長期（1955～1973年）までにその文化は一気に消えてしまった。1998年に自主事業として仲間と始めた「クイーンズメドウ・カントリーハウス」は、遠野らしさを取り戻し次世代に継承していくインフラストラクチャーの再構成のデザインであり、人馬共生の地域文化再生プロジェクトといえます。里山の牧草地で馬を放牧し、そこに連なる田畠で有機農業を営み、馬付き住宅にはゲストが宿泊できます。

僕らはそれまで行政や民間の仕事をたくさんしてきたけれど、理不尽なことがあまりに多かった。「人新世」の地層でいえば日本は「昭和・平成層」と僕は呼んでいますが、そのなかに入らないとできないことがいっぱいあった。昭和・平成層は戦後の法律、縦割り社会、専門業界の権益の仕組みの総体のこと。それを突破するのに自分のエネルギーをこれ以上は注いでいられない、自分たちでやれることをやろうというのが、このプロジェクトの原動力になっています。

——2003年には、開発に関わった「5×緑（ゴバイミドリ）」の事業がスタートしました。

田瀬 アクロス福岡の竣工後、土がないところ、たとえば東京のような“建材砂漠”をどうやったらオアシスに変えられるのかを問われて、アクロス福岡の技術で誰もが手に入れられるものを考え始めました。そして、金網でつくったカゴに保水性の高い人工軽量土壤を詰めて植生基盤をつくり、上面だけではなく側面にも多様な里山の植物を植え込む実験を重ねました。

福岡天神の複合施設「アクロス福岡」は1995年に竣工。設計は日本設計と竹中工務店が手がけ、基本計画まではアルゼンチン出身でアメリカを拠点に活躍した建築家のエミリオ・アンバースが参画。地上14階建てで、公園に面した南側が「ステップガーデン」と呼ばれる階段状になっており、そこを緑化している。竣工後しばらくは建物然とした姿だったが、今は樹木が生長し、緑に覆われている。（上の写真：株式会社プランクト／下：長井美咲）



建築家の永田昌民さんが設計し、田瀬さんが造園を手がけた「知多の家」。2014年に竣工。下屋を張り出させてリビングを設け、その床と同じ高さでテラスと庭が続く。リビングの掃き出し窓は南に正対する。地面はテラスと同じ高さになるようにかさ上げした。田瀬さんが住まい手に提案した水盤には水草が浮き、メタカも棲息。植栽は地域の自生種から、オダモやヤマザクラ、ヤマボウシなど。新建新聞社発行の書籍『居心地のよさを追ふ』に、この家が詳しく掲載されている。庭その他についての永田語録も収録。（写真：喜多章）

ユニットの生産・製作・販売は仲間の会社が事業化し、その担当者が独立して2013年に株式会社ゴバイミドリを立ち上げました。同じ面積でもこのユニットは緑の量が5面（5倍）だから、名前が「5×緑」なんです。今では個人住宅の庭や外構、ストリートファニチャー、ビルや大規模な施設の屋上緑化や壁面緑化など、さまざまところで使われています。ユニットはオンラインショップでも売っていて、小さなものは20cmの立方体タイプからあります。誰でも使えるものですよ。

——今回のインタビューは株式会社ゴバイミドリに場所をお借りしています。ベランダは「5×緑」の緑に満ちあふれ、都心とは思えません。

田瀬 ここだけで150種以上の植物が育っています。6～7年でこうなりました。夏はベランダの外が見えないくらい緑が生い茂り、秋の紅葉を経て葉っぱが落ち、冬には見通しがよくなります。ひとくちに緑色といつても、植物は種類によって葉の色がみんな違うから、種類が多いとそれだけで錦を織りなすようになります。いろいろな植物の色が混ざっているのが日本の風景の色なんです。植え方は、何も特別なことはなく、ここでは植物図鑑に出てくる順に、機械的に苗木を植えました。並びや相性なんかは考えなくていい。鳥や風がデザインしてくれて自然に混ざるのと同じことです。人間のデザインなんて自然に対しては大したことない。

地域に自生する植物を選びさえすれば誰でもできることなんだけど、逆にいえば、地域の植物を選ぶことがなにより大事なんです。

地域の植物なら、鳥も虫も種を周囲に運んで広げてくれる。

そうすると個人の庭が地域の環境になっていくんです。堀で囲つてガーデニングして外来の植物を育てても、それは個人の楽しみ

にしかなりません。

地域の植物を植えることがなにより大事

——田瀬さんは大規模なプロジェクトのランドスケープに携わる一方、建築家の永田昌民さんが設計した住宅の造園も手がけておられます。

田瀬 僕は永田さんとご一緒するまで、個人住宅の庭はほとんどやりませんでした。初めて協働したのは2001年で、永田さんが亡くなるまでに15の庭をつくりました。うち12が個人住宅の庭です。永田さんは住まい手に必ず「1本の木を植えませんか」と勧めていました。また、永田さんの設計図には「庭」の文字がふたつ書いてあることが多い。南庭と北庭とか、表の庭と奥の庭とか。庭がふたつあると住まいの回遊性が高まるし、南と北では同じ時刻でも緑の色彩や輝きが違うから、部屋から眺めても庭に出ても多彩な景色を目にすることができます。

それと永田さんがすごいのは、こちらが植物を植えたいところに植えられるように、外構をきちんと意識した設備の配管計画がなされていたこと。これは庭に关心のある建築家でも徹底している人は少ないものです。

——住宅の庭づくりにアドバイスをいただくとすると、どんなことがあるでしょうか。

田瀬 住宅に限らず、庭をつくるときは地域に対する愛情が欠かせません。工務店は特に、地域に根差して活動しているわけだから、地域に対する愛情をもっと持つてほしい。戦後の日本は持ち



今回のインタビューは株式会社ゴバイミドリの協力を得て、東京・市谷仲之町の、1960年代に建てられた集合住宅の一室で行った。ベランダは「5×緑」の植物に満ち、都心にいることを忘れさせる。

家政策を推進してきましたが、宅地計画は道路を通して区画を割っただけで、なんのビジョンもない。その結果が今の、ただ家が建っているだけという“住宅集合”の景観です。それを1軒の家の庭から変えていく、そんな気概を工務店には持ってほしいと思います。個人住宅の庭であっても、庭づくりはすなわち、まちづくりなのですから。

庭や外構の設計が苦手な工務店は多いですね。家を建てる際に、デザインや構造、材料、設備などと同じように庭のことも勉強してください。とはいえ、建築関係の雑誌に付いている植物図鑑みたいなものを参考にしてはダメです。あれは全国どこも同じ情報で、まったくあり得ない。

庭をつくるときは、ともかく地域の植物を植えること。敷地周辺の緑の様相を見て、地域らしい緑を見つける努力をしましょう。地域の植物は地元の「植物誌」を見ればわかります。少なくとも100年前からある樹木や、その地域に長く残る林の植物を調べてみてください。

それと植えるときは、種類が多いほどいい。遮景（目隠し）の生垣を多種類の混植生垣にしたり、地面を多種類の地被植物で覆ったり。小さな庭でも100種類くらいの植物を植えることができます。50種以上になれば、二十四節気ごとにいかがそれを気づかせてくれるでしょうし、飛来する鳥や虫たちも多彩になります。

庭づくりの楽しみは長く住まい手のもの

——木はどこに植えるのがよいでしょうか。

田瀬 木は、“緑の雲”となる落葉樹を南側や西側の窓の近くに植えることです。開口部に影を落とす位置に植える。生長すればするほど夏の日除けになり、室内が涼しくなります。道路からの見た目を考えて木を植えるのは二の次。まず日除け。そして葉っぱが落ちても、それをゴミとして捨てなくていいようなつくりになっているほうがいいですね。コンクリートなんか打ったら落ち葉は掃くしかない。

家づくりは庭づくりの始まりで、その楽しみは長く住まい手のものですから、庭は植物の生長を楽しむことが大事です。木も初めから大きいものを植えなくていい。小さく植えて大きく育てる、あるいは、多種類の植物を毎年少しづつ植え足していく。そういったことで、暮らしさより豊かになるでしょう。

楽しみといえば、小さな池（水盤）をつくることもお勧めします。池

の底には農薬などに汚染されていない土を入れて水生植物を植え、メダカやマブナなど地域の水系の小さな在来魚を入れる。池は水中の酸素のバランスが取れていれば、水は澄んだまま。きれいな水は清涼感がありますし、なにより水面に陽光や月光が反射したり、周りの情景が映ります。鳥やトンボは必ず飛来するので、日常生活が俄然ドラマチックになる。

石材も地域のものを使いましょう。既製のコンクリートブロックやネットフェンス、輸入石材を使った外構デザインは全国各地にあふれているけど、時間の経過とともにくすんでみすぼらしくなります。地域の材料を使った庭はその地域でしか生まれ得ないもので、地域のアイデンティティを具現化した住まいになります。それと道路を構成しているU字溝や縁石なども、平気で使わないでほしい。道路みたいになっちゃいます。

駐車スペースをどう確保するかは外構計画で多くの人が悩むところでしょう。道路に対して車を縦に置けないからと横に置いている家をよく見るけれど、道路を歩く人は車しか目に入らず、まったく魅力のない景観になる。そなならぬように家を考えてほしい。なにより道路沿いをコンクリートにしたら、後になって住まい手が庭をつくりたいと思っても、ほとんど不可能です。僕は、駐車スペースをつくっても舗装はするなどといつもいっています。住まい手が自分で撤去できないもので舗装してはいけません。

——「里山住宅博」では街区全体の計画を手がけていました。

田瀬 「里山住宅博in神戸」のときは、計画地がもともと都市再生機構（UR）が粗造成した宅地で、従来型の区画割りとひな壇がすでに決まっていて、僕がやれたことは外構コードをつくり、各戸の道路沿いや隣地との境界を統一的な混植生垣で緑化することでした。

ほかに、里山住宅博でお勧めの植物ということで、小さな植物図鑑をつくりました。工務店が入居者に差し上げられるように、牧野富太郎の植物図鑑から抜粋して200種くらい。植物は地域ごとに特色があることを意識し、それを守ることが原則です。東京都にも一応、「植栽時における在来種選定ガイドライン」があるけれど、なんの効力もないし、このために生産者に働きかけることもしています。

これは造園業界が悪いのだけど、地域の木を植えたいのに、近くに生産者がいないという問題は現実にあるんです。そうなると苗を探すところから始めなければなりません。

「里山住宅博in神戸」は2016年に、地域工務店によるモデルハウスの期間限定の展示場としてオープン。会期終了後、モデルハウスは購入者に引き渡され、現在は「上津台百年集落街区」となっている。敷地境界は生垣で緑化しているほか、宅地以外の部分を共有地として自主管理している。中下の写真は2019年に撮影。植物が育っていることがわかる。（中下の写真以外：上田明／中下の写真：株式会社プランタゴ）



徳島県神山町が中学校寄宿舎の跡地に整備した、子育て世代向けの町営の賃貸集合住宅「大塙地の集合住宅」。8棟20戸あり、すべて木造2階建て。既存解体から基礎整備、建築やランドスケープの設計・監理までを「神山町のあす環境デザイン共同企業体」が一貫して担当。田瀬さんはランドスケープだけではなく、RC造の既存建物の解体計画や解体ガラの再利用も先導した。町は工期を4期に分け、小規模な町内工務店が参入できるようにし、地域内経済循環を実現。地場資材を使うことで、地域の大工職の技術継承や生業継続にも寄与している。2022年度グッドデザイン賞ベスト100に選ばれた。（写真：神山町のあす環境デザイン共同企業体）

徳島県神山町の「^{おのじ}大塙地の集合住宅」のときも、地域の木を育てている人がいなかった。植木の生産者はひとりいたのですが、その人がつくっているのは都市部の植木市場で売るための流行りの木でした。そこで、地元の高校の造園土木科の生徒に参加してもらい、挿し木や実生で約5,000鉢つくって植えました。植えるのも高校生にやってもらった。野芝以外はすべて地域のものを植えています。

草取りや木の手入れなど庭の管理は入居者が、専用庭だけではなく共用庭も含めて自分たちで行っています。そういう入居条件なんです。僕は竣工してからも、入居者に「選択除草」を指導するため神山町に通っています。

クリエイティブな「選択除草」

——選択除草とはどういうものですか？

田瀬 在来種を残し、帰化植物を選んで取り除くという方法です。つまり、大量に繁殖したら困る草だけを取り除く。何度もやつてみれば、どういうものか、すぐにわかるようになります。

僕がランドスケープデザインを担当した時の素スタジアム・補助競技場の「みどりの広場」では2012年から毎年、選択除草の勉強会を行っています。作業は、そのときいちばん多く生えている帰化植物はなにかをまず見極め、今日はこの1種類だけを取ると決めて始めます。そのときの状況によって決めるからクリエイティブで、創造的な植物管理といっています。見本を手に持ちながらの作業だから子どもにもできるし、探しながらの作業だから頭を使い集中する。そのため終わった後は爽快感が残ります。労働とは全然違う。

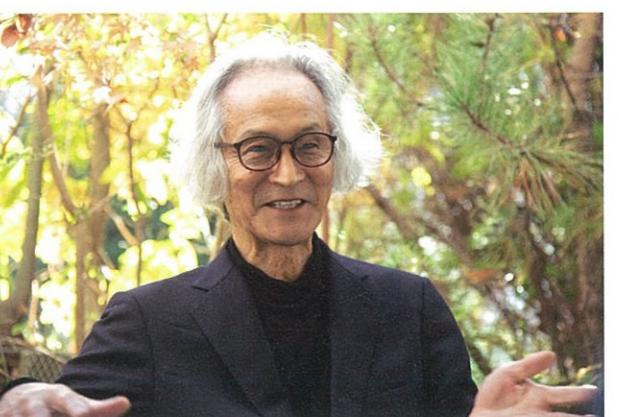
初めは学生の勉強の場としてやっていて、途中から企業や役所の人も参加するようになって10年続けています。その間に生えてきた在来種は133種類。一方、確認された帰化植物は75種類。植物はそれだけ出たり入ったりする。選択除草によって草地の様相が変わってくると、チョウチョやバッタの数や種類も変わってきます。

——最後になりましたが、プランタゴという社名の由来は？

田瀬 小学生のときに市ヶ谷から練馬の石神井公園に引っ越しましてね。当時はあたり一面麦畠で、屋敷林もぼつぼつあり、とっ

てもきれいだったし、草いっぱいのなかで遊んでいました。麦畠はキャベツ畠、次に芝畠へと変わっていき、高度経済成長期には宅地開発が進み、武蔵野の風景をほぼ壊してしまった。僕はその移り変わりを目の当たりにしたから、首都圏で仕事するときは武蔵野の景色が戻るよう計画することが当然と考えるようになったのだと思います。「その現場の近くに生えている植物がいい」というのは非常に素直な発想なんです。

環境の移りわりはしようがないなと思いつつ見ているだけでしたが、大学を卒業したころに決定的なことが起こりました。僕が通っていた近所の都立高校のグラウンドが変わってしまったんです。そのグラウンドは都立高校のなかで1番目か2番目に広く、僕が通っていたころは茶の生垣で囲われていたけど、桜の列植の脇から誰でも中に入れた。夏になるとグラウンドに草が生えてくるのもよくて、体育の授業の最初の10分は草取りをやらされたりしてね。それが草の生えない仕様に変わった。周囲もフェンスになって卒業生も入れなくなった。公立学校のあるべき姿ではないとショックを受けました。それで、そっちがそのつもりなら、こっちはグラウンドを草むらにしてやろうと思い、1年かけてオオバコの種を集め、翌年グラウンドに忍び込んでそれを蒔いたんです。でも、サッカーのセンターサークルにはどうしても草が生えない。4年やって諦めました。その後、独立して事務所を始めるときには、ワークショップ・プランタゴという名前になりました。プランタゴはオオバコの学名です。



田瀬理夫（たせ・みちお）
1949年東京都生まれ。1973年千葉大学園芸学部造園学科（都市計画・造園史専攻）卒業後、株式会社富士植木に入社。1977年に独立し、ワークショップ・プランタゴを開設。1990年より株式会社プランタゴ代表。